



Doshisha University Academic Repository

同志社大学学術リポジトリ

グラント先生をしのんで

著者	根本 加寿子
雑誌名	主流
ページ	12-15
発行年	1975-09-16
権利	同志社大学英文学会
URL	http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000015259

思う。先生のそんな一面をこの会合を通して私ははじめて知った。その後、およそ20年間、いろいろなことでお世話になったが、私にとってグラント先生は常に思いやりのある誠実な助言者であった。先生のご冥福を心からお祈りします。

グラント先生をしのんで

根 本 加 寿 子

「恩師」という語感はあまり好きではないのだけれど、グラント先生は、私にとって、恩師としか言いようのない方だった。

先生との最初の出会いは、大学の英文学科主催の懇親会の時で、私が二年生になった時だった。順番に誰かを指名するというやり方で自己紹介が始まり、やがてグラント先生が立ち上がられた。たまたま同じテーブルに坐り合わせた私は、先生の巨体と思いがけないほどナイーブな瞳を見上げながら、先生の自己紹介を聞いたのだが、最後に「前田さん」と呼ばれたのには驚いた。初対面の先生から指名されるという予期せぬ出来事に驚いて飲物にむせている私に、先生はいたずらっぽい笑顔とウィンクを送って来られた。以後、キャンパスや図書館や街で偶然お会いすると、近視の私は、たいてい自分から気づく前に、先生から「ハイ、前田さん」と声をかけられることになってしまった。

二年、三年と、先生の文学史や小説研究の講義を興味深く聴き、課題のレポートなどもおほめを頂いたりし、私は比較的良い生徒だったようだ。それでも、サルトルやカミュに夢中になったり、サークル活動の方に熱を入れたりしていた私は、英文学科の学生としては不熱心な方で、一方、グラント先生も、私にとって、わりと親しい先生の一人であるにとどまって

いた。ところが最後の年になって、私はグラント＝ゼミに入らざるを得なく(?)なってしまった。元々は十九世紀の文学に引かれていながら、いざ卒論を書く段になって、私はグレアム・グリーンに強い執着を覚え、三年の終りに、グリーンを卒論で取り上げたい旨、希望を提出していた。そしてある日、私は先生に呼ばれた。先生の言われるには、グリーンは作家としてまだ定評がなく、卒論を指導される先生もなく、従って貴女の申し出は却下されようとしている、が、私はグリーンに関心があるので、どうしても卒論でやりたいなら、これから一緒に勉強してもいい、ということだった。私は先生の思いやりに感謝し、色々迷ったものの、グリーンをやりたい一心で、結局グラント＝ゼミのイレギュラー・メンバーにして頂くことに決めた。

この時のグラント＝ゼミは、後にグラント夫人になられた京子さんも一緒に、十三人のメンバーはよく学びよく遊んだ。お酒に強い先生を中心によく集まっては飲み、私などその一年でかなり酒量が上がってしまった。先生は自宅を解放したりして、気軽に私達と付きあって下さった。そういう時の先生は、学生達のつけた“グランチ”という呼称にふさわしく、ふだんより一層気さくでユーモアに富み、朗らかだった。一方、ゼミの時間は、グラント教授らしい貫録と適度のきびしさの加わった緊張感に充ちた魅力ある時間だった。そこで行われるテキストの解剖とでも言うべき方法によって、私は、文学の評価ということについて再認識させられた。卒論に関しては、週一度の先生との討論に備えて毎週レポートの提出を課せられた。キャンパスの内外で何かと忙しくしていた私はそれがつい遅れがちになり、以前と違って、たちまち良くない生徒になり下がった。先生がこまめに私を叱咤激励し、レポートを催促して下さったことを、今感謝と共に思い出している。研究室での先生との討論はいつも予定の時間を越え、いつも私は先生から新たな勉強への意欲をかき立てられた。ある時、先生から、G. グリーンの思想の中に「北森嘉藏という日本の神学者」の思想

と共通点があると言われて、私は驚ろいた。実は私もそのことに気づいていて、先生が北森氏のことを御存じないかもしれないと思い、同じ言い方でそのことを言うつもりだった。先生も私が読んでいないと思われてそうおっしゃったのに違いないと、おかしく思う一方、先生の見識の広さに感心してしまった。又、卒論のテーマを決めた時、先生はそのテーマが私らしくていいと言われ、私のことを serious-minded だと評された。そしてその次に、ちらとウイंकを送りながら、But I'm also a serious-minded man とおっしゃった。先生が御自分のことをそう表現なさったことはとても印象に残っている。先生をよく知るにつれて、私は、先生がまさに serious-minded な、しかも暖かなお人柄の方だと確信せずにはいられなかった。卒論の提出間際に流感にかかって四苦八苦している時、先生が心配して私の家まで電話を下されたこともあった。もう時効になったから書いてもいいと思うが、最後のゼミ旅行の時、先生は京子さんの肩に手を回して歩いたりなさって、しかもそれが全然悪びれた様子ではなく、さすがの悪童連(?)もひやかしの言葉も出せなかったこと等も、懐しく思い出される。

卒業後も、同窓会などで先生との交流は続き、私の結婚式ではたどたどしい(?)日本語で名スピーチをして下さった。お会いするたびに、卒業生のことを細かく覚えていらっしゃるのには感心させられた。最後にお目にかかった時、私が同人誌に詩を書き始めたことを以前手紙に書いたのを覚えておられ、是非書き続けるようにと励まして下さったことも、今となってはしみじみと思い出される。

先生の訃に接する一年余り前、私は父を失った。二つの死がもたらした悲しみはその生々しさに於ては違いがあったものの、日が経つにつれて深まってくる喪失感と同じだった。「生」とは徒勞に充ちた虚しい時間の流れにすぎないんですねと、当の先生に愚痴を言ったら、どんなお顔をなさるだろうか。おそらく、私のペシミズムを否定して、逆に励まして下さる

だろう。生前の先生のお顔と、serious-minded という言葉を思い出しながら、そんな気がしてならない。

Robert Grant's Different Worlds

Alden E. Matthews

My introduction to the worlds of Robert Grant began in 1952, our first year as missionaries in Japan. Robert and Jean had returned to the U. S. on furlough after their first five years of service at The Doshisha. Since their house would be empty for a year we were assigned to live in it for our first year of language study. Through that house, its small garden, Otsui San (who stayed to help us over our first hurdles), and the neighborhood, we began to explore Robert's worlds.

The walls of his pleasant study on the first floor just off the front *genkan* were lined with shelves which were full of Robert's books—books on literature, American and British; books on history, Japanese and American; books on culture, east and west; books on religions; modern western novels; and English translations from Japanese. It was in that room that we first encountered Natsume Soseki's "Botchan" and the fascinating Makioka sisters. It was from Robert's books that we began to glimpse what Endo Shusaku would later call the "swamp" of Japanese culture and Benda San would label *Nihon-kyo* (Japanese religiosity).

The next year, when the Grants were back from furlough and we